# いのち輝く未来目指して

## 秋田大学医学部創立50周年記念講演会 × 医療フォーラム

秋田大学医学部創立50周年記念講演会と医療フォーラムが10月4日、秋田市のあさた芸術劇場ミルハスで開かれた。「いのちを輝く『あさたの未来』へ」をメインテーマに、がん患者の支援と治療、研究に関わる専門家3人が特別講演を行い、最新の取り組みなどを紹介した。また活躍の場を乗り越えたタレントの堀ちえみさんをゲストに迎え、特別講演の講師と県医師会長の小泉ひろみさんが登壇しパネルトークでは、がん治療の未来について意見を交わした。主催は秋田大学医学部、秋田大学医学部付属病院、本道医学振興会、秋田魁新報社、秋田テレビが共催した。

### 開会あいさつ

**秋田大学学長 南谷佳弘さん**

**次の50年を切り開く**

秋田大学医学部の創設時、県内には医学部がなかった。地域で医師を育てるとは県民の願いであり、付属病院の開設はその願いの結実だったといえる。本来は2020年に創立50周年を祝う予定だったが、コロナ禍を乗り越えられることを願ったい。今、記念の時を迎えられることを喜びたい。本フォーラムを医学部の歴史を振り返り、次の50年を切り開くことしよう。

### ビデオメッセージ

**元内閣総理大臣 菅義偉さん**

**医療人の育成に貢献**

秋田大学医学部は、戦後初めて県内に設置された国立大学医学部として、全国各地で活躍する医療従事者を多数輩出している。コロナ禍は、ワクチン接種をはじめとした国の命と暮らしを守る活動に尽力してくれた。改めて協力に感謝を伝えたい。引き続き地域医療と連携し、国民の健康と命を守る人材の育成に力を注押してほしい。

### 閉会あいさつ

**秋田大学付属病院長 渡邊博さん**

**地域医療を次世代へ**

第一線で活躍する方々の想重な話を聞くことができた。新しい知識を共有するとともに、今後の地域医療や高齢社会をどう形成し、次世代に引き渡すかについて大きな問いを投げかける内容だった。秋田の未来を輝かせるための原動力にしたい。医学部と付属病院は教育、研究、診療という三つの命を集たし、未来の医療を創造し、地域と共に歩んでいく。

**パネリスト**
堀 ちえみ
山口 育子
瀬戸 泰之
小林 久隆
小泉ひろみ

**司会**
羽渕 友則
（敬称略）

## パネルトーク

### 早期発見、早期治療を 堀さん
### がん検診は怖くない 山口さん
### 受診する動機つくる 瀬戸さん

最新のがん治療や患者支援について意見を交わしたパネルトーク

**羽渕** 秋田県は、がん死亡率が全国で最も高い。対策はあるか。

**小泉** がん対策は防ぐ検診が大事。予防法はピロリ菌やウイルスなどのワクチン接種がある。喫煙や飲酒を控えるなど生活習慣の改善も有効だ。早期発見、早期治療につなげるため、がん検診の受診率も高めたい。

**瀬戸** 国立がん研究センターは厚生労働省と連携し、がん検診の周知に取り組んでいる。検診の重要性を知ってもらい、受診する動機をつくるための広報活動力を入れている。

**山口** 検診の受診を促すためにはマンツーマンでの情報提供が必要だと思った。丁寧に伝えることが重要。「もしも、がんになったら」という怖さゆえに受診に二の足を踏む人もいるだろうが、早期発見すれば怖くないと知ってもらいたい。

**堀** 私はお子さんの発見が遅れたことを後悔した。発見が遅れれば早いほど命が救われると訴えたい。

**小林** 米国は、職場健診などの無料の検診制度があり、乳がんなどの検診は公費がかかる。日本の制度はよくできていて、活用した方がよい。

**羽渕** 病院の選び方や医療スタッフとの付き合い方に、こつはあるか。

**山口** かかりつけ医に相談して、信頼できる医師や病院を紹介してもらうといい。医療スタッフから必要な情報をうまく聞き出すには、患者自身にコミュニケーション力が求められる。

**堀** 私はリウマチの持病があるが、がんの治療をきっかけに通院先を一つにまとめた。診療科を越えて情報共有してもらえる。

**小泉** 高度な医療を受けたいと思うのは当然だが、まずはかかりつけ医を診て、大きな病院を紹介してもらってほしい。

**羽渕** 県内では、基幹病院とかかりつけ医の顔の見える関係を築いている。かかりつけ医を頼ってほしい。

**瀬戸** 国立がん研究センターには全国から患者さんが訪れる。退院時、当センターから通方ペンフレット「認知症」を行っている。これは原生医師の病院で薬剤治療などを受けられる。

**羽渕** がん死亡率が高いのはなぜか。

**瀬戸** 胃がんのきっかけはピロリ菌への感染が影響しており、今後は減少するだろう。大腸がんは発生場所により原因が異なることが分かってきており、それぞれ予防対策などが異なっている。検診子は飲酒と喫煙、本人が予防に取り組むことが大事だ。

**小林** 米国は肺がんの死亡率が高いが、放射線の使用基準が厳しいため、一般向けの検診は行われていない。

**小泉** 県内では消化器の内視鏡検診を実施する医療機関が増えている。丁寧な検診を受けられることを多くの人に知ってもらいたい。

**堀** どんなに気をかけていても、がんになる可能性はあるのだから、怖がって検診を避けるのはよくない。がんをやっつけるためには、早期発見が最も確実な方法だと思う。

秋田大学大学院医学系研究科長・医学部長の羽渕友則さん

県医師会長の小泉ひろみさん

パネルトークに耳を傾ける来場者

## ゲストトーク

### 医療制度、活用しよう 小林さん
### 誕生日前後に検診を 小泉さん

**羽渕** 医療現場では最近、インフォームドコンセント（説明と同意）よりも、シェアード・デシジョン・メイキング（共有意思決定）が大事と言われる。

**山口** 多くの医師は患者に十分なことをしてあげたいと思っている。ただ、患者が「先生、お任せします」と言ってしまうと、医師は「これでいいのか」と不安になる。患者が自分の病気や治療について理解し、医師と一緒に考えることが大切だ。

**小林** 日本の医療制度を活用すれば、県民の健康はさらに増進される。研究者としても良い治療法を見つけたい。

**小泉** 年1回の検診を忘れずに。誕生日の前後の受診がお勧めだ。カレンダーに書き込んでほしい。かかりつけ医と看護師に何でも相談してもらいたい。

**堀** 人生という道のりは長いが、生きてさえいればどんな困難も乗り越えていける。早期発見、早期治療に加え、医師を信じて標準治療を受けてもらいたい。

**瀬戸** 国立がん研究センターでは協問の内容や患者の反応などを、医師と看護師がそれぞれカルテに記載する。治療が困難な症例の場合、医師、放射線技師、看護師の専門家が集まり、患者さんと家族と共にさまざまなことを決めていく。

**羽渕** 県民にメッセージを。

**山口** がんの早期発見、早期治療に加え、手術後の早期離床と早期リハビリも大事だ。患者が前向きに努力すると体がついてくる。患者だからと弱りきってしまわないことが大事だ。

**瀬戸** がんの主たる危険因子は感染、喫煙、飲酒の三つ。できることから取り組んでもらいたい。

**小林** 日本の医療制度を活用すれば、県民の健康はさらに増進される。研究者としても良い治療法を見つけたい。

**小泉** 年1回の検診を忘れずに。誕生日の前後の受診がお勧めだ。カレンダーに書き込んでほしい。かかりつけ医と看護師に何でも相談してもらいたい。

**堀** 人生という道のりは長いが、生きてさえいればどんな困難も乗り越えていける。早期発見、早期治療に加え、医師を信じて標準治療を受けてもらいたい。

## 寄付金を募集

### 交流施設建設・学生の留学支援 記念事業多彩に

秋田大学医学部は創立50周年に合わせて、交流施設の整備や国際交流促進などの記念事業を計画している。秋田大学医学部創立50周年記念会は、これらの事業に対する寄付を募っている。

記念事業は▷学生や教職員が交流や会議などを行う「学生&職員ウェルビーイング施設」の建設▷学生の留学や海外講師の招待を含む国際交流支援▷学部50年史の発行―など。募金額5億円を目指しており、個人や企業・団体などに寄付金を募っている。9月時点での寄付額は計2億6千万円。

12月31日まで。所定の振込用紙を使用し、郵便振替か銀行振込により寄付する。50周年記念事業のホームページ（https://www.med.akita-u.ac.jp/50th/）からインターネット決済で送金することもできる。個人が1口5千円、法人・団体が1口5万円。

振込用紙の送付などの申し込み、問い合わせは秋田大学医学部創立50周年記念会事務局☎018・884・6006

医学部創立50周年記念事業のホームページはこちら

特別講演やパネルトークの模様はきょう25日午後2時から、秋田テレビの特別番組「秋田大学医学部創立50周年記念講演会×秋田大学医療フォーラム」で放送します。

**主催** 秋田大学医学部、秋田大学医学部付属病院、本道医学振興会、秋田大学医学部創立50周年記念会
**共催** 秋田県、秋田県医師会、秋田魁新報社、秋田テレビ
**協賛** 秋田銀行、北都銀行、秋田県薬剤師会、秋田回生会病院、山王整形外科医院、サノ・ホールディングス、TDK

〈企画・制作〉 秋田魁新報社営業局

## ■がんと共に生きる ―いのちの主人公・からだの責任者として

認定NPO法人ささえあい医療人権センターCOML理事長
山口 育子さん

やまぐち・いくこ 1965年大阪府生まれ。自らの患者体験から、患者の自立と主体的な医療への参加の必要性を痛感。92年からCOMLスタッフとして活動。NPO法人ささえあい医療人権センターCOML専務理事を経て、2011年から理事長。

### 医療者と思いを共有

活動を始めて26年、きっかけは、私自身が前立腺がんの「患者」だったことだ。当時の医療は、患者に情報が開ずされていた時代で、なかなか思いのことを教えてもらえなかった。

私たちの活動の柱は電話相談。昨年度の相談内容まとめでは、医師への不満が突出している。これは他職種にも向けられべき期待が、いまだに医師だけでなく、さまざま職種の人に協力してもらい治療を受ける時代になってきていることを認識してほしい。

電話相談を通じ、患者側にも課題がある実感している。一つは、医師が説明する情報をしっかり理解できていない。専門的な用語がからない場合は、質問や確認が大事になる。二つ目は、思いのズレ。例えば、医療機関で名前の確認があるが、医療者側は患者を取り違えないために行っているのに、患者は「何度も聞かれる」と怒ってトラブルになるケースがある。医療者、患者や家族、それぞれの認識を埋めてくことが必要だ。

他にも訴った情報ネットのみになる人が増えていることや、医療者とのコミュニケーション不足が挙げられる。

医師への苦情の中で多い「説明不足」は、日本の医療現場におけるほとんどのインフォームドコンセントが、医師や医療者が必要だと思った一方通行の情報提供になっていることが要因。

そこで新たに出てきたのが「シェアード・デシジョン・メイキング（共有意思決定）」という概念。患者と医療者が情報を共有し、話し合いながら今後の方針を一緒に決めていこうという考え方だ。これから目指すべき医療の姿だと思う。

## ■がん医療の最前線 ―課題と展望

国立がん研究センター中央病院長
瀬戸 泰之さん

せと・やすゆき 1958年秋田市生まれ。東京大学医学部卒。ロボット支援手術を活用した食道がん根治術「NOVEL」などを開発。2008年東京大学医学部消化管外科学教授、19年同大付属病院長。24年国立がん研究センター中央病院長。

### 秋田が全国の見本に

2024年の罹患率のデータで、秋田は全国平均29・5%を大きく上回る39・5%で全国トップ。50年予測では、秋田は男女とも前期・1位で、49・9%。全国平均は37・7%予測されている。20年～30年後の日本の問題が今、秋田に起きているということ。高齢者はがんで命を落とすことが多い。がん全体、各部位の死亡率もワースト多い秋田が、がんとの戦いを苦闘できれば、全国の見本となるはずだ。

がんは見えないため、診断は生検と病理検査しなければ確定できない。例えば胃がんを例に、どこに移行があるかがわからないため、正確な部分を言めて大きく切除しなければいけなくなる。今は、がんがある部分だけを取り出す研究が進んでいる。がん細胞を薬内服とする発想で、がん細胞を光らせる「蛍光プローブ」が開発された。

内視鏡で液を散布するなど、数ミリがん細胞が光る。生検中に転移がある場所もわかるようになった。核医学が、診断と治療を同時にできる（内容療法）新しい時代を迎えようとしている。

内容療法の一つ「ルタテラ」は、世界でも権威のある医学雑誌で経済的な分析論文に効だと取り上げられた。注射した放射線性物質が腫瘍細胞内取り込まれてから放射線を出し、がん細胞だけが壊れていくため、がん手術はロボットの時代でもある。人の手がいらない部分まで細やかに安定した手術ができ、傷もなくなる。ロボット手術の外科医の人分が働きをする。

がん治療が進歩する中、高齢化率が進み、がんの手術が多い秋田だからこそ、取り組まなければいけないことがある。秋田大学医療部を中心に、がんとの戦いを展開していってほしい。

## ■がんに強く体に優しい ―近赤外線光線免疫療法（光免疫療法）

米国立衛生研究所
終身主任研究員
小林 久隆さん

こばやし・ひさたか 1961年兵庫県生まれ。京都大学医学部卒。2011年に近赤外光線免疫療法を開発。14年米国立衛生研究所長官賞受賞。光免疫療法は20年、世界で初めて米国で薬事承認された。22年関西医科大学光免疫医学研究所長。

### がん細胞だけを攻撃

がん治療は、手術・放射線・抗がん剤の三大がん治療に加え、免疫療法がある。多くの課題もある。そこで第5の治療法である「光免疫療法」を考えた。一番の目的は、できる限り体の中のがん細胞だけを攻撃し、治療を助ける細胞を温存することだ。近赤外線を利用した免疫治療法で、近赤外線は、光を体内に導入することで免疫細胞を活性化し、がん細胞だけを攻撃する。

実際に免疫のあるマウスに二つ腫瘍を植えて光を当てると、2日でがん細胞がほとんど消えた。10年前から人への臨床を開始し、最初の9例中、3例の患者のがんが完全に消えた。この結果をもとに日本で許可が出た治験では新たに上頭面扁平上皮がんが消失したという報告があった。光免疫療法を行うと、がんを壊す免疫を作る療法になる可能性が高いことも分かった。つまり、がんの再発抑制もできるということだ。今、二つのタイプの薬が日本では使えるようになった。薬は食道がんや子宮頸がんにも効くされており、治験が始まっている。

さらに、がんの成長を助ける制御性T細胞を選択的に免疫を強化する光免疫療法の薬を作った。例えば二つ腫瘍があると、一つの腫瘍でしか治療をすると治療をしていない腫瘍も小さくなる。四つ腫瘍があっても一つを光で治療すると全ての腫瘍が小さくなる。こちらも2年前から治験がスタートしており、成果が出ている。

このように、世界中で免疫治療治験が行われ、薬の開発も進んでいる。患者の体の負担を抑える治療として、あらゆるがんに使えるような治療になってほしいと思う。

## ■がんと思いを共有



最新のがん治療や患者支援について意見を交わしたパネルトーク

私は2018年、舌がんのステージ4と診断され、舌の6割以上を切除した。失った舌の代わりに、太ももの皮膚の一部を移植した。手術は11時間に及んだが、おかげで命をつなぐ。日常生活を取り戻すことができた。

患者は、がんを「怖い」「憎い」と思い苦しんでいる。その病気の未に寛ん上げられた実績が医療の進歩につながっている。だから私は勇気の気持ちで戦いつまい生きたい。がんを経験した人の多くが、再発や転移におびえている。私も再発が配だが、くよくよ考えて、なるがままに任せるしかない。

今は全国から問い合わせがあり、何ができるか、何をすべきかを考えている。病気を受置した人が、自分を責めてしまうことが多いと聞いた。

術後の発音で、舌がんとは別に早期の発道がんが見つかった。ステージ0。転移ではなく、後日、内視鏡の手術を受けた。がんの告知は、最初のうちは、ショックだった。3度目の告知を受けることになったら自分はどうなってしまうだろうと、とてつもない恐怖に襲われた。でも、早期発見、早期治療になったことは、ありがたいことだ。

私たちの活動の柱は電話相談。昨年度の相談内容まとめでは、医師への不満が突出している。これは他職種にも向けられべき期待が、いまだに医師だけでなく、さまざま職種の人に協力してもらい治療を受ける時代になってきていることを認識してほしい。

電話相談を通じ、患者側にも課題がある実感している。一つは、医師が説明する情報をしっかり理解できていない。専門的な用語がからない場合は、質問や確認が大事になる。二つ目は、思いのズレ。例えば、医療機関で名前の確認があるが、医療者側は患者を取り違えないために行っているのに、患者は「何度も聞かれる」と怒ってトラブルになるケースがある。医療者、患者や家族、それぞれの認識を埋めてくことが必要だ。

他にも訴った情報ネットのみになる人が増えていることや、医療者とのコミュニケーション不足が挙げられる。

医師への苦情の中で多い「説明不足」は、日本の医療現場におけるほとんどのインフォームドコンセントが、医師や医療者が必要だと思った一方通行の情報提供になっていることが要因。

そこで新たに出てきたのが「シェアード・デシジョン・メイキング（共有意思決定）」という概念。患者と医療者が情報を共有し、話し合いながら今後の方針を一緒に決めていこうという考え方だ。これから目指すべき医療の姿だと思う。

## ゲストトーク

### リハビリは一音ずつ

ほり・ちえみ 1967年大阪府生まれ。81年の第6回ホリプロタレントスカウトキャラバン優勝を機に芸能界入り。82年アイドル歌手としてデビュー。83年に初主演したドラマ「スチュワーデス物語」が大ヒットした。2019年に舌がんと診断され手術を受ける。リハビリを経て、テレビ出演や講演活動、コンサートなどで活躍している。

自指して一生懸命頑張ってきた。早期に治療すれば人生を生き直すことができる。人生の続きを歩むことができることを伝えることが目標だった。

一つの音を出すことから始め、2音、3音と続けて出せるようになったら、単語を話す練習をした。短い文章を話せるようになったら、絵本を音読した。最終的に小説1冊を読み上げられるようになった。

その頃、娘が「歌ってみたらどう」と勧めてくれた。覚悟を決めて舞台を知め、1曲歌えるようになるまで1年半かかった。2曲目から習得が速くなり、すぐに初期以1歌えるようになった。夫と子人の子どもたちが「生き続けてほしい」と願ってくれて、私に生きる勇気をくれた。

がん患者を支える家族は迷いを抱えている。そう気付いたのは2年、アビュー40周年記念コンサートの時だ。病気が復活して最初のコンサートだった。

初日の公演を終えて家族で過ごしている時、母が「手術がなかったら、今のおかんはおらんかった。手術していて良かった」と言った。それを聞いた娘が「そうだね、これでよかったんだよね」と返すのを聞いて、家族の複雑な思いを知った。

私は生涯手術によって生存率を高めることができたけれど、食べたり話したりする機能を一時的に失った。家族は生きてほしいと願いながら、苦しむ私を見て複雑な思いだっただろう。

がんは患者本人のみならず、家族にも暗い影を落とす。早期発見、早期治療は、自分のためにも、家族のためにもとても大事。しっかり気をつけることが、ご家族の幸せにもつながったと医療機関を訪れる人に伝えたい。

医師を信じて、標準治療を受けてもらいたい。

わたしたちはこれからも
人と地域に向き合い続けます
医療法人回生会 心療内科 精神科 内科
秋田回生会病院
お気軽にご相談ください 018-832-3203
〒010-0063 秋田県秋田市牛島西1丁目7-5
WEBサイトはコチラ
秋田県依存症治療拠点機関（アルコール健康障害、ギャンブル等依存症、薬物依存症）当院は依存症治療の専門プログラムがあります。

かかりつけ薬剤師・薬局は
あなたの健康をサポートいたします！
「かかりつけ薬剤師・薬局」を活用していただくための3つのポイント
Point 1 お薬のことを何でも相談 飲み合わせや副作用など気になることは気軽に相談できます
Point 2 あなた専用の記録で安心 処方内容をまとめて管理し重複投与や副作用を防ぎます
Point 3 地域で支える健康づくり 病気の予防や健康相談など、日常のサポートもお任せください
ABSラジオで放送中！
みんなの健康
【毎週火曜】AM 11:35～11:45（再放送／PM 6:10～6:20）
周波数(kHz) ●秋田936 ●浅舞1485 ●大館1557 ●鹿角801
エフエム秋田で放送中！
隣の薬剤師さん
【毎週火曜】お昼 12:55から 周波数 82.8MHz
一般社団法人 秋田県薬剤師会

あきたの健やかな明日を考える
北都銀行は、「秋田大学医学部創立50周年記念講演会×秋田大学医療フォーラム」に協賛しています。
感謝の気持ちをこめて 130 130th Anniversary 北都銀行

あなたと支える、あきたの未来。
秋田大学医学部創立50周年記念講演会
×
秋田大学医療フォーラム
〈あきぎん〉も協賛しています。
地域の皆さまの福祉・医療の充実を応援いたします。 秋田銀行